

報道関係各位

2025.10
福田美術館

あの頃は

～栖鳳・魁夷・又造らが起こした昭和の風～

100th Anniversary of Showa 1 :

An Era Colored by Seihō, Kaii, Matazō, et al

2026.1.31(土) - 4.12(日)



昭和
100年
記念

昭和100年記念

「あの頃は～栖鳳・魁夷・又造らが起こした昭和の風～」

激動の昭和を彩った画家たちの100点の名作を一挙公開！

福田美術館では、昭和100年という節目の年を記念し、昭和時代に描かれた選りすぐりの100点の作品を展示します。1926年から1989年まで64年間に及んだ昭和という時代は、戦争と復興、高度経済成長、バブル景気と、貧しさも豊かさも併せ持つ激動の時代です。美術もまたその時代の風と無縁ではありませんでした。

明治・大正を生き抜いた竹内栖鳳（たけうちせいほう）、横山大観（よこやまたいかん）らが円熟期を迎えた戦前、厳しい時局の中で活動を続けた戦中、そして東山魁夷（ひがしやまかい）や杉山寧（すぎやまやすし）ら若い世代が、逆風を受けながらも未来へと前進した戦後――昭和の美術は、時代ごとにまったく異なる表情を見せています。

100点の作品を通じて、意欲と熱気に満ちたあの特別な時代の風が嵐山に吹き渡ります。

会期：2026年1月31日(土)～2026年4月12日(日)

前期：1月31日(土)～3月2日(月) 後期：3月4日(水)～4月12日(日)

【主催】 福田美術館
【後援】 京都府、京都市、京都市教育委員会
【会場】 福田美術館

【作品点数】

合計：100点

※うち初公開：30点

第1章 昭和の風 ～戦前・戦中～

戦争の影が芸術に与えたもの

画家たちも、自身の創作で風を起こしつつ、また昭和という時代の風を受けて生き抜いてきました。しかし、その風向きは、戦前と戦中では大きく異なります。日本人の暮らしの様式がまだ和風で、床の間や座敷を飾るために、掛軸や屏風が重宝されていました。慶事などの特別な機会に、特別な画帖を誂えて贈ることもしばしばあった時代です。一方、戦中には日本の勝利を願い、富士山や神社、八咫鳥（やたがらす）のような信仰の対象が数多く描かれ、戦争の影響は芸術にも大きく及んでいました。

終戦の年である2月に逝去した橋本関雪（はしもとかんせつ）は、世相と真摯に向き合い、「戦時を描く必要があるならば自分に依頼を、そして、その分だけ若い作家には自由な学びの機会を」と訴えました。彼が様々な想いを託した晩年の作品も、今回特別に展示します。



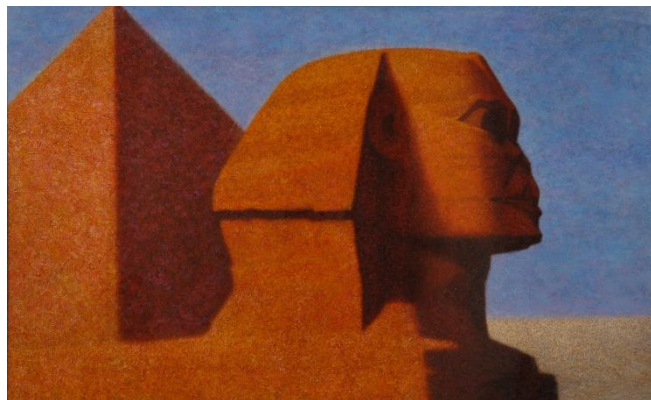
橋本関雪《俊翼》（部分）
昭和16年 福田美術館蔵 前期展示

第2章 昭和の風 ～戦後～

戦後の逆風によって生まれた新しい日本画

戦後の日本画には、戦前の画家たちが思いもよらなかった逆風が襲いかかりました。「花鳥風月のような、旧来の価値観から抜け出せなかった日本画のようなものを珍重していたことが、戦争に敗れる原因となったのだ」という「日本画滅亡論」が声高に唱えられたのです。若い世代や壮年の画家たちは、この逆風に立ち向かわざるを得ませんでした。

杉山寧《悠》昭和38年
福田美術館蔵 通期展示



戦後、日本画で一般的になった、多様な色彩を持つ新岩絵具を厚く塗り重ねて描くスタイルは、この時代に洋画に対抗すべく工夫されたものです。厚塗りによって生まれる重厚な色調を駆使し、東山魁夷は欧州の風景を、徳岡神泉（とくおかしんせん）や高山辰雄（たかやまたつお）は心情を託した花鳥や人物を描き、画壇に新たな風を吹き込みました。琳派などの伝統美に着目した加山又造（かやまたぞう）も、自ら新しい風を起こし、時代の旗手となった1人です。第2章では、様々な世相を映しながら吹き続けた風を、戦後昭和に活躍した画家たちの傑作を通じて体感することができます。

杉山寧は、1928年（昭和3）に東京美術学校日本画科を首席で卒業し、日展で活躍しました。独特の色使いで、画面いっぱいにダイナミックに描かれたモダンな印象のスフィンクスは、杉山が海外旅行に出かけた際、心に残ったモチーフです。本作《悠》は戦後日本画に新しい潮流をもたらした杉山の代表作であり、本展で福田美術館初公開となります。

第3章 池田遙邨と富田溪仙～嵐山にも昭和の風が吹く～

遙邨と溪仙、2人の画家が追い求めた「あの頃」の美意識

嵐山は、令和の今も多くの人々の心を惹きつける日本有数の景勝地です。それは、昭和時代も同じでした。第3章では、窓外に広がる嵐山の風景を愛した昭和の2人の画家を通して、「あの頃」を紹介します。

岡山・倉敷出身の画家、池田遙邨（いけだようそん）は、竹内栖鳳に学んで戦前から頭角を現し、戦後は京都画壇を代表する重鎮として文化勲章を受章しています。旅を愛し、全国を歩いた彼が最も好んだのが嵐山の風景で、元旦の朝から写生に訪れるほどでした。

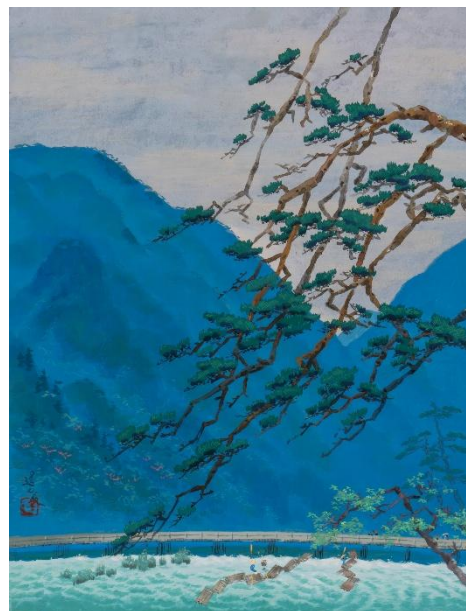
遙邨が先輩として最も尊敬した画家である富田溪仙（とみたけいせん）は、博多生まれ、京都で都路華香（つじかこう）に学びました。その後、富岡鉄斎（とみおかてっさい）を慕い、風趣あふれる画風を展開していきました。その芸術は横山大観からも高く評価されています。嵐山を愛した溪仙は、嵐山にアトリエを構え、創作活動に励みました。現在は二尊院に眠っています。

溪仙は戦前の、遙邨は戦後の昭和の時代に、他の画家とは違う美意識を発揮した代表的作家です。彼らの作品に満ちている風韻は、実際に見なければ理解しにくいものです。

あの頃には確かに存在したものの、平成、令和を経て、昭和100年を迎えた今ではほとんど失われてしまった、純朴で静か、そして豊かな芸術の世界を、2人の画家を通じてご紹介します。



富田溪仙《嵐峡晴朗図》（部分）
昭和時代 福田美術館蔵 後期展示



池田遙邨《嵐山薫風》
昭和時代 福田美術館蔵 通期展示

プレス用画像

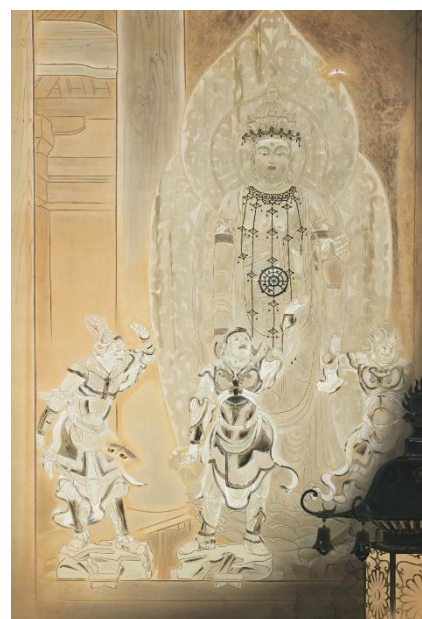
※広報画像は以下の申請フォームよりダウンロードいただけます。
<https://tayori.com/f/showa100/>



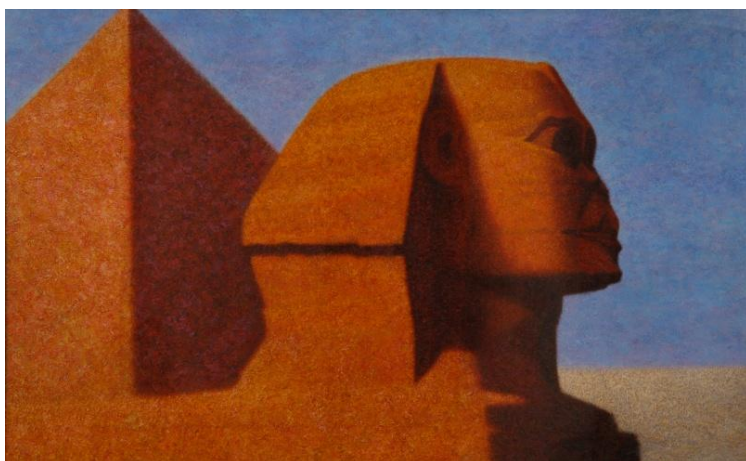
加山又造《おぼろ》昭和61年
 福田美術館蔵 通期展示



加山又造《日輪》昭和時代
 福田美術館蔵 後期展示



杉山寧《慈悲光》昭和11年
 福田美術館蔵 通期展示



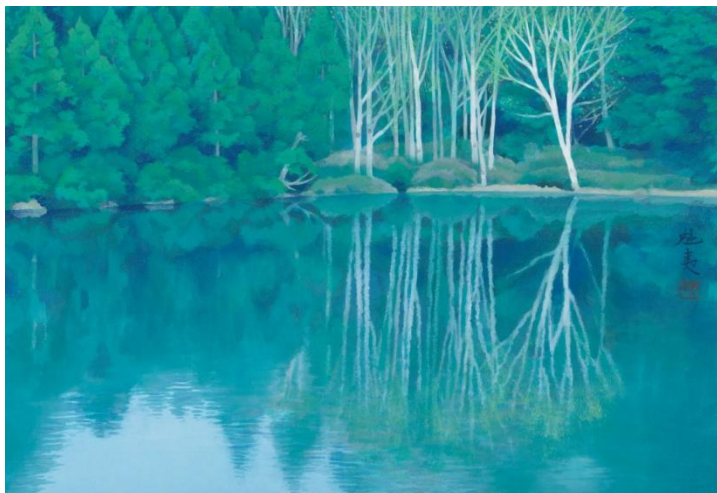
杉山寧《悠》昭和38年
 福田美術館蔵 通期展示



加山又造《白馬》昭和時代
 福田美術館蔵 後期展示

※これらの作品は掲載にあたって著作権者への確認が必要です
 ※全てトリミング不可です ※別途費用が発生します

※広報画像は以下の申請フォームよりダウンロードいただけます。
<https://tayori.com/f/showa100/>



東山魁夷《静けき朝》昭和37年 福田美術館蔵 後期展示



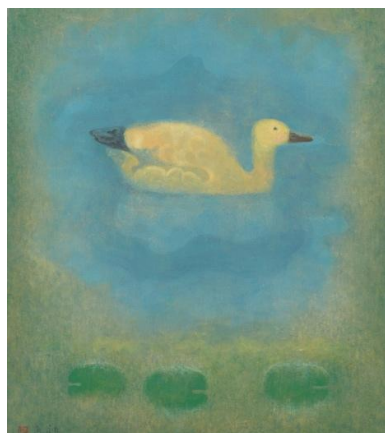
東山魁夷《夕月》昭和21年 福田美術館蔵 通期展示



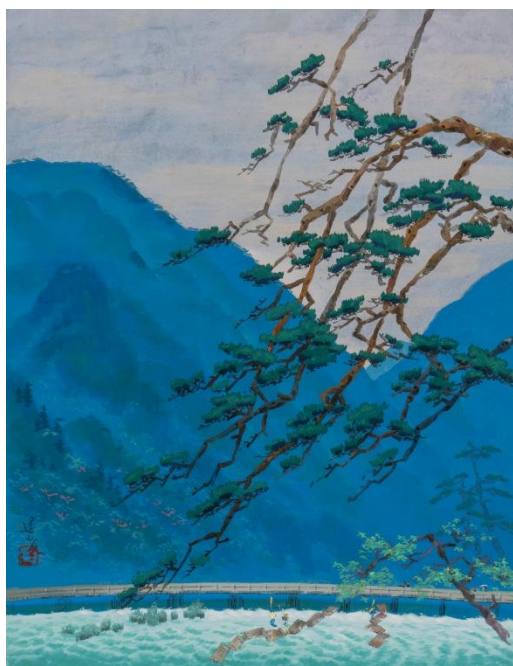
東山魁夷《静宵》昭和時代 福田美術館蔵 前期展示



徳岡神泉《鯉》昭和7年
福田美術館蔵 前期展示



徳岡神泉《池》昭和42年
福田美術館蔵 前期展示



池田遙邨《嵐山薫風》昭和時代
福田美術館蔵 通期展示

※これらの作品は掲載にあたって著作権者への確認が必要です
※池田遙邨《嵐山薫風》以外の作品は全てトリミング不可です
※池田遙邨《嵐山薫風》以外の作品は別途費用が発生します



竹内栖鳳《富嶽》 昭和2年 福田美術館蔵 前期展示



小杉放菴《山童嬉遊図》昭和4年
福田美術館蔵 前期展示



橋本閑雪《俊翼》昭和16年
福田美術館蔵 前期展示



富田溪仙《嵐峡晴朗図》昭和時代
福田美術館蔵 後期展示

※これらの作品は著作権フリーです

展覧会概要

- 企画展名 昭和100年記念 「あの頃は～栖鳳・魁夷・又造らが起こした昭和の風～」
- 会 期 2026年1月31日(土)～2026年4月12日(日)
 <前期>1月31日(土)～3月2日(月)
 <後期>3月4日(水)～4月12日(日)
- 開館時間 10:00～17:00 (最終入館 16:30)
- 休 館 2月17日(火)、3月3日(火)、3月17日(火)
- 主 催 福田美術館
- 後 援 京都府、京都市、京都市教育委員会
- アクセス 〒616-8385 京都府京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3-16
 JR山陰本線(嵯峨野線)「嵯峨嵐山駅」下車徒歩12分／阪急嵐山線「嵐山駅」下車徒歩11分／嵐電(京福電鉄)「嵐山駅」下車徒歩4分

■ 料 金	一般	高校生	小・中学生	その他
	1,500 (1,400) 円	900 (800) 円	500 (400) 円	* 障がい者と介添人1名まで各900 (800) 円 * 幼児無料 * () 内は20名以上の団体料金

プレスリリース／広報用画像に関するお問合せ

福田美術館広報事務局 (共同ピーアール内)
 担当：田中真衣、樋口
 TEL：03-6264-2045
 Email：fukudamuseum-pr@kyodo-pr.co.jp

一般の方からのお問合せ

福田美術館 TEL：075-863-0606 (代表) Email：info@fukuda-art-museum.jp

福田美術館について

美しい自然と日本美術の融和。日本文化の新たな発信拠点として

京都・嵯峨嵐山は古来歌枕でもある場所で、多くの貴族や文化人に愛され芸術家たちが優れた作品を生み出す源泉となってきました。オーナーである福田吉孝は京都に生まれ育ち、そこで事業を興し、今日まで続けてきたことに対し、地元の方々のご支援とこの地に恩返しをしたいという想いから、2019年10月、美術館の設立に至りました。今や日本国内だけでなく、世界中から多くの人々が訪れる観光地である嵐山。その中でも渡月橋を望む大堰川（桂川）沿いの景勝地に位置し、四季折々でそれぞれに変化する風景は1000年変わらず人々を魅了してきました。この美しい自然と共に日本美術の名品を愉しんでいただくことで、嵐山が世界有数の文化発信地となることを願います。



嵐山にふさわしい、未来へむけた日本建築の形

福田美術館の建築を手掛けた安田幸一氏は、「蔵」をイメージした展示室や外の自然とのつながりを感じられる「縁側」のような廊下など、伝統的な京町家のエッセンスを踏まえつつ、これから100年のスタンダードとなるような新しい日本建築を目指しました。また、庭には大堰川に連なる水鏡のごとく嵐山を映し出す水盤が設けられており、渡月橋が最も美しく一望できるカフェからは最高の眺めを味わうことができます。

